早稲田大学図書館所蔵 富岡鉄斎旧蔵明刊『釈氏源流』について

河野　貴美子

はじめに

明治・大正を通じて独自の突出した存在感を放った文人であり、画家であり、蔵書家であった富岡鉄斎（一八三七～一九二四）の旧蔵書、明刊『釈氏源流』がこのたび早稲田大学図書館に収蔵されることとなった。

明の釈宝成が編集した『釈氏源流』二巻は、上巻に釈迦伝にまつわる故事、下巻には中国への仏教の伝播と普及にまつわる故事を収めるもので、毎半葉に一故事を上図下文の形で説き示す絵入り本（帯図本）である。合計四百余話にのぼる故事を各種仏典等から抽出し、それらを時系列に沿って配列して「釈氏」の「源流」と東漸を説く本書は、中国のみならず、韓国、日本、ベトナムなど東アジア漢字漢文文化圏に広がり盛行した仏伝文学の一中心をなしたものである。また、仏教の伝播は夙に図像と密接に関わるものであったが、各故事に挿絵を加えた本書のアイディアやスタイル、そしてその重刊の過程は、明という時代の寺院の出版文化のありようを示す具体例としても少なからぬ学術的価値を有する。一方、『釈氏源流』はその後改編本も作成され、さまざまな版が生み出されるものの、日本における伝本は稀で、ここに紹介する明刊本も、国内では他に存在が確認できないものである。しかしこのたび、かつて

『早稲田大学図書館紀要』第六十九号（二〇二二年三月）

富岡鉄斎が蒐集し手元に置いたその一本が幸いにして早稲田大学図書館の所蔵となった。

小論では、まず、『釈氏源流』の成立から当該明刊本に至る版行の経緯を整理したうえで、当該明刊本の書誌情報を紹介する。そして後半では、富岡鉄斎の蒐書を実現したネットワークや、その蔵書中における当該『釈氏源流』の意義、また富岡文庫蔵書の入札、売立の情報を含めて、鉄斎旧蔵本が辿った経緯をみる。

富岡鉄斎が暮らした京都室町通一条下ルの住居の玄関には「不読五千巻書者無得入此室（五千巻の書を読まざる者は此の室に入るを得ず）」と書かれた額が掛けられていたことを、富岡家と親交のあった東洋学者神田喜一郎が紹介している。[1] これは富岡家が所有していた清の文人趙之謙が揮毫した額を書家の山本竟山に縮写させて玄関に掛けていたものとされるが、この言葉はもとは中国南北朝の学者崔儦が書斎の入口の戸に張り出していたものということである。[2] 神田喜一郎がこの額について「鉄斎芸術の本質にも触れる重大な問題ではなかろうか」と述べるように、鉄斎にとって蒐書と読書は、自らの業を支える基本であり必須の重大事であったさまが窺える。そうした鉄斎と書物のつながりも含めて若干の考察を及ぼしてみたい。

一、明刊『釈氏源流』

このたび早稲田大学図書館の所蔵となったのは、明代の北京大興隆寺の圓道による重刊本である。そこでまず、圓道重刊本に至るまでの『釈氏源流』版行の経緯を確認し、その後、圓道重刊本についての詳細を述べることとする。[3]

（1）洪熙元年刊本／正統元年刊本／成化二十二年刊本

『釈氏源流』の初版本とされるのは、蘇州西園寺所蔵の版本である。[4] 下巻の第十七話から第百八十七話までのみを

残す零本[5]で、巻首や末尾の刊記を欠くが、これを覆刻したものと考えられる嘉靖三十五年（一五五六）刊本によって、その原形を推し量ることができる。

嘉靖三十五年刊本は現在、北京市文物局、台湾国家図書館、重慶華岩寺覚初仏教図書館に所蔵が確認でき、そのうち北京市文物局蔵本は影印が出版されている[6]。北京市文物局蔵嘉靖三十五年刊本は、巻上首に「大報恩寺沙門釋 寶成 編集」、巻上末に「旹洪熙元年歳在乙巳秋七月解制日四明釋 寶成 誌」とあり、四明（寧波）出身で南京大報恩寺に属する釈宝成が洪熙元年（一四二五）に刊行した版本に基づく覆刻である。巻上末には「嘉靖参拾伍年歳在丙辰秋月吉旦釋浄用印施」との刊記があり、また「廣東潮州府僧綱司護印浄用偕祀」とあることから、この覆刻本は潮州の釈浄用によって作成されたこと、さらに巻下末の木記には「北京順天府宛平縣高佛寺二茶和尚、信官惠・潮分守道魏紹芳、比丘洪文發心仝刊印施。願見聞随喜者、皆共成佛道」とあることから、その後北京において印行されたものであり、蔡穂玲氏の研究によれば、それは一六六四年以後のこととされる[7]。嘉靖三十五年刊本の構成は、上下巻ともに二百話ずつ合計四百話を収め、各巻末に「釈音」を附す[8]。これが洪熙元年刊本の形であったと考えられるが、『釈氏源流』は洪熙元年後まもなく別の版が重ねて版行されている。正統元年刊本である。

中国国家図書館[9]及び東京・芝の増上寺[10]には巻上に二百六話、巻下に二百二話、合計四百八話を収める同版とおぼしき『釈氏源流』が伝わる[11]。その巻上末には「大明永樂二十年歳次壬寅、檢閲、抄寫、編集、命善人顧道珍書、王恭畫、喩景濂刊。又於宣德九年十月命廬陵王榮顯重刊。正統元年歳在丙辰、孟冬十月吉日、堅密室沙門釋寶成題」との刊記があり、これによれば、永楽二十年（一四二二）に顧道珍[12]が書し、王恭が絵を描き、喩景濂に刊行させたもの（洪熙元年刊本）が先行して刊行されていたが、その後宣德九年（一四三四）に王栄顕に重刊を委ねて正統元年（一四三六）に刊行されたものとのことである。また巻上末には洪熙元年の釈宝成の刊記に続いて「聚寶門来賓樓姜家印行」の木記

があり、また巻下末には「大報恩寺堅密室刊行　聚寶門来賓樓姜普成印施」とある。聚宝門は南京城の南の正門である。鉄斎旧蔵の圓道重刊本は、この正統元年刊本を北京にて覆刻したものであるが、そこに進む前に、成化二十二年刊本についても触れておかなければならない。

『釈氏源流』は明の憲宗による改編本も刊行されている。[13] これは巻首に成化二十二年（一四八六）八月十五日の「御製釈氏源流序」を冠する内府刊本である。毎張表に絵、裏に文を載せる形に改められ、全四巻、合計四百話を収める。

以上、洪熙元年から約六十年の間に『釈氏源流』の重刊、改編がなされていることを確認した。時は折しも南京から北京への遷都の時期にあたる。[14]『釈氏源流』の刊行もまた、南京から北京へと拠点が移り、やがて比丘圓道による重刊本が現れる。その一本が富岡鉄斎の手を経て早稲田大学図書館の所蔵となったものである。

（2）富岡鉄斎旧蔵『釈氏源流』圓道重刊本

圓道重刊本は、巻上に二百六話、巻下に二百二話を収め、その各題目や体式も正統元年刊本に一致することから、正統元年刊本の覆刻と認められるものである。イギリス・大英図書館[15]及び中国・首都図書館[16]に同版が存するが、日本には他に伝本は確認できない。以下、富岡鉄斎旧蔵『釈氏源流』圓道重刊本の基本的な書誌を記す（〔　〕内は推定）。

釈氏源流二巻　六冊　ハ４　６２０９
〔明〕〔釈宝成〕撰
〔明代後期〕刊（大興隆寺比丘圓道重刊、衍法寺比丘本讃印）覆明正統元年（一四三六）刊本　帯図本　富岡鉄斎旧蔵

後補薄茶色無文表紙（三六・一×二一・五糎）【図1】、線装、包角、本文白紙、裏打修補、副葉。

首に王勃の文（首欠、存一張、四周双辺、無界、半葉十二行、毎行二十二字、有圏点、版心中縫部「釋氏源流［　］」、末に「唐　博士太原王　勃撰」とある）を存す【図2・図3】。大英図書館蔵本に照らすと、王勃「釈迦如来成道応化事蹟記」四張のうちの末一張にあたるものである。王勃は初唐の詩人。「釈迦如来成道応化事蹟記」は、仏の誕生から入滅、そして中国への仏教伝播を説く文と銘から成る。なお大英図書館蔵本首には王勃「釈迦如来成道応化事蹟記」の前に憲宗の「御製釋氏源流序」をも附すが、[17] 富岡鉄斎旧蔵本にも「御製釋氏源流序」が存したか否かは不明。

四周双辺二層（二八・五×一七・六糎、上層一三・七×一七・六糎、下層一四・三×一七・六糎）、上図下文、下層右に界（跨行）を引き四字の題及び小字にて話番号を記す【図3】。また話番号下に稀に施主者名を刻す（第一冊巻上・二一に「宣武門信官肖通施財刊板一塊」、同・二二に「信官肖通刊板」、同・四九及び五〇に「慈仁寺圓貴刊」【図4】、同・五一に「慈仁寺僧德通」、同・五二に「僧德通同母郭氏」とある）。[18] 本文無界、毎半葉十八行、毎行十六字、有圏点。版心粗黒口、双黒魚尾（対向）、中縫部に題「釋氏源流巻幾」、張数を刻す。本文は稀に板木の欠損、埋め木等の修補がみられる。巻尾題「釋氏源流巻幾」【図5】。本文に次いで「釋音」を附す（各巻一張、四周双辺、有界、半葉十二行、毎行二十二字、低一格

【図1】　表紙

【図２】　第一冊首

【図３】　第一冊巻上首

【図４】　第一冊　巻上第五十・第五十一　施主者名

【図５】　第三冊　巻上尾題

にて釋音対象字を掲出の後、小字双行にて釋音を記す）。毎冊の張数は以下の通り。

第一冊（三十七張）王勃「釋迦如來成道應化事蹟記」末尾一張及び巻上・一～七二

第二冊（三十七張）巻上・七三～一四六

第三冊（三十一張）巻上・一四七～二〇六及び「上巻釋音」

第四冊（三十四張）巻下・三～七二（首（一・二）及び一張（五七・五八）欠）

第五冊（三十張）巻下・七三～一三二

第六冊（三十四張）巻下・一三三～二〇二（二張（一六三・一六四、一八一・一八二）欠）及び「下巻釋音」

また上下二巻所収の各話の題と話番号は左の通り。落張部分の題は正統元年刊本（正）で補い、嘉靖三十五年刊本（嘉）との相違は注記を施した。

巻上

一　買花供佛[1]　二　上託兜率[2]　三　瞿曇貴姓[3]　四　浄飯聖王[4]　五　摩耶託夢[5]

六　樹下誕生[6]　七　従園還城[7]　八　仙人占相[8]　九　大赦修福[9]　一〇　姨母養育

一一　往謁天祠　一二　園林嬉戯　一三　習学書数　一四　講演武芸　一五　太子灌頂

一六　遊観農務　一七　諸王挍力　一八　悉達納妃　一九　五欲娯楽　二〇　空声警策

二一　飯王応夢　二二　路逢老人　二三　道見病臥　二四　路睹死屍　二五　得遇沙門

二六　耶輸応夢　二七　初啓出家　二八　夜半踰城　二九　金刀落髪　三〇　車匿辞還

三一　車匿還宮　三二　詰問林僊　三三　勧請廻宮　三四　調伏二僊　三五　六年苦行

三六　遠餉資糧　三七　牧女乳糜　三八　禪河澡浴　三九　帝釈献衣　四〇　詣菩提場

四一 天人献草
四二 魔女妓媚
五一 菩薩降魔
五六 龍宮入定
六一 転妙法輪
六六 降伏火龍
七一 迦葉求度
七六 羅睺出家
八一 月光諫父
八六 仏救尼揵
九一 再還本国
九六 化諸婬女
一〇一 貧公見仏
一〇六 悪牛蒙度
一一一 盲児見仏
一一六 老乞遇仏
一二一 度網漁人
一二六 施食縁起

四二 龍王讃歎
四七 魔軍拒戦
五二 成〔等正〕覚[10]
五七 林間宴坐
六二 度富楼那
六七 急流分断
七二 假孕謗仏
七七 須達見仏
八二 申日毒飯
八七 初建戒壇
九二 為王説法
九七 阿難索乳
一〇二 老人出家
一〇七 白狗吠仏
一一二 老婢得度
一一七 説苦仏来
一二二 度捕猟人
一二七 目連救母

四三 坐菩提座
四八 魔衆拽瓶
五三 諸天讃賀
五八 四王献鉢
六三 仙人求度
六八 棄除祭器
七三 請佛還国
七八 布金買地
八三 仏化無悩
八八 敷宣戒法
九三 仏留影像
九八 調伏酔象
一〇三 醜女改容
一〇八 火中取子
一一三 勧親請仏
一一八 談楽仏至
一二三 仏化醜児
一二八 仏救嬰児

四四 魔王得夢
四九 地神作証
五四 華厳大法
五九 二商奉食
六四 船師悔責
六九 竹園精舎
七四 認子釈疑
七九 玉耶受訓
八四 降伏六師
八九 姨母求度
九四 度諸釈種
九九 張弓害仏
一〇四 夫人満願
一〇九 見仏生信
一一四 嘱児飯仏
一一九 祀天遇仏
一二四 救度賊人
一二九 金剛請食

四五 魔子諫父
五〇 魔子懺悔
五五 観菩提樹
六〇 梵天勧請
六五 耶舎得度
七〇 領徒投仏
七五 度弟難陀
八〇 漁人求度
八五 持剣害仏
九〇 度跋陀女
九五 降伏毒龍
一〇〇 仏化盧志
一〇五 鸚鵡請仏
一一〇 因婦得度
一一五 貸銭辦食
一二〇 仏度屠児
一二五 度除糞人
一三〇 鬼母尋子

一三一 小児施土
一三六 施衣得記
一四一 天龍雲集
一四六 金鼓懺悔
一五一 付嘱国王
一五六 仏救釈種
一六一 請仏入滅
一六六 請仏住世
一七一 仏現金剛
一七六 造塔法式
一八一 昇天報母
一八六 仏現双足
一九一 育王起塔
一九六 毱多籌筭
二〇一 天親造論 12
二〇六 達磨西来 17

一三二 楊枝浄水
一三七 衣救龍難
一四二 仏讃地蔵
一四七 楞伽説経
一五二 法華妙典
一五七 為母説法
一六二 仏指移石
一六七 天龍悲泣
一七二 如来懸記
一七七 応尽還源
一八二 仏母散花
一八七 凡火不然
一九二 育王得珠
一九七 蜜多持幡
二〇二 神僧応供 13

一三三 採花献仏
一三八 説呪消災
一四三 勝光問法
一四八 圓覚三観
一五三 飯王得病
一五八 最初造像
一六三 嘱分舎利
一六八 魔王説呪
一七三 最後垂訓
一七八 双林入滅
一八三 仏従棺起
一八八 聖火自焚
一九三 迦葉付法
一九八 馬鳴辞屈
二〇三 十大明王 14

一三四 燃灯不滅
一三九 証明説呪
一四四 維摩示疾
一四九 楞厳大定
一五四 仏還覲父
一五九 浴仏形像
一六四 付嘱諸天
一六九 純陀後供
一七四 臨終遺教
一七九 金剛哀恋
一八四 金棺不動
一八九 均分舎利
一九四 迦葉入定
一九九 龍樹造論
二〇四 護法諸天 15

一三五 造幡供仏
一四〇 龍宮説法
一四五 文殊問疾
一五〇 般若真空
一五五 殯送父王
一六〇 姨母涅槃
一六五 付嘱龍王
一七〇 度須跋陀
一七五 荼毘法則
一八〇 仏母得夢
一八五 金棺自挙
一九〇 結集法蔵
一九五 商那受法
二〇〇 提婆鑿眸 11
二〇五 師子伝法 16

巻下

一 欠〔諸祖遺芳〕 18
二 欠〔仏先現瑞〕 19
三〔梓潼聞仏〕 20
四 列子議聖
五 梓潼遇仏

一六 明帝感夢
一一 康僧舎利
一六 図澄神異
二一 法開医術
二六 道融捎法
三一 夢中易首
三六 捨道奉仏
四一 天雨宝華
四六 達磨渡江
五一 誦経免死
五六 吐肉飛鳴
六一 恵布度生
六六 棄財為僧
七一 玄琬勧誡
七六 法融馴獣
八一 通慧神異
八六 窺基三車
九一 儀文行布

七一 比法焚経
七六 漢書論仏
八一 善悪報応
八六 浮江石像
九一 支遁誡勖
九六 虎渓三笑
一〇一 文帝問法
一〇六 採乳遇難
一一一 栴檀仏像
一一六 誦経延寿
一二一 罷道為僧
一二六 僧実救難
一三一 妙悟法華
一三六 晋王受戒
一四一 智璪見龍
一四六 慧乗対詔
一五一 法聡伏虎
一五六 焼毀仙書
一六一 面陳邪正
一六六 七詔還都
一七一 勧度僧尼
一七六 智興扣鐘
一八一 著内徳論
一八六 法順祈雨
一九一 玄奘取経
一九六 上表不拝
二〇一 遠礼文殊

一四一 鄧山舎利
一四六 支遁誡勖
一五一 虎渓三笑
一五六 文帝問法
一六一 採乳遇難
一六六 栴檀仏像
一七一 誦経延寿
一七六 罷道為僧
一八一 僧実救難
一八六 妙悟法華
一九一 晋王受戒
一九六 智璪見龍
二〇一 慧乗対詔
二〇六 法聡伏虎
二一一 焼毀仙書
二一六 面陳邪正
二二一 七詔還都
二二六 勧度僧尼
二三一 智興扣鐘
二三六 著内徳論
二四一 法順祈雨
二四六 玄奘取経
二五一 上表不拝
二五六 遠礼文殊

一五一 耆域治病
一五六 道安遠識
二〇一 羅什訳経
二〇六 文帝論法
二一一 宝誌事蹟
二一六 法蔵縁起
二二一 法聡伏虎
二二六 焼毀仙書
二三一 面陳邪正
二三六 七詔還都
二四一 勧度僧尼
二四六 智興扣鐘
二五一 著内徳論
二五六 法順祈雨
二六一 玄奘取経
二六六 上表不拝
二七一 遠礼文殊

二六一 郯亭度蟒
二六六 鄧山舎利
二七一 支遁誡勖
二七六 虎渓三笑
二八一 文帝問法
二八六 採乳遇難
二九一 栴檀仏像
二九六 誦経延寿
三〇一 罷道為僧
三〇六 僧実救難
三一一 妙悟法華
三一六 晋王受戒
三二一 智璪見龍
三二六 慧乗対詔
三三一 法聡伏虎
三三六 焼毀仙書
三四一 面陳邪正
三四六 七詔還都
三五一 勧度僧尼
三五六 智興扣鐘
三六一 著内徳論
三六六 法順祈雨
三七一 玄奘取経
三七六 上表不拝
三八一 遠礼文殊

二七一 牟子理惑
二七六 耆域治病
二八一 道安遠識
二八六 羅什訳経
二九一 文帝論法
二九六 宝誌事蹟
三〇一 法蔵縁起
三〇六 法聡伏虎
三一一 焼毀仙書
三一六 面陳邪正
三二一 七詔還都
三二六 勧度僧尼
三三一 智興扣鐘
三三六 著内徳論
三四一 法順祈雨
三四六 玄奘取経
三五一 上表不拝
三五六 遠礼文殊

三一一 釈迦牟尼
三一六 明帝感夢
三二一 康僧舎利
三二六 図澄神異
三三一 法開医術
三三六 道融捎法
三四一 夢中易首
三四六 捨道奉仏
三五一 天雨宝華
三五六 達磨渡江
三六一 誦経免死
三六六 吐肉飛鳴
三七一 恵布度生
三七六 棄財為僧
三八一 玄琬勧誡
三八六 法融馴獣
三九一 通慧神異
三九六 窺基三車
四〇一 儀文行布

三六一 比法焚経
三六六 漢書論仏
三七一 善悪報応
三七六 浮江石像
三八一 支遁誡勖
三八六 虎渓三笑
三九一 文帝問法
三九六 採乳遇難
四〇一 栴檀仏像
四〇六 誦経延寿
四一一 罷道為僧
四一六 僧実救難
四二一 妙悟法華
四二六 晋王受戒
四三一 智璪見龍
四三六 慧乗対詔
四四一 法聡伏虎
四四六 焼毀仙書
四五一 面陳邪正
四五六 七詔還都
四六一 勧度僧尼
四六六 智興扣鐘
四七一 著内徳論
四七六 法順祈雨
四八一 玄奘取経
四八六 上表不拝
四九一 遠礼文殊

四一一 郯亭度蟒
四一六 鄧山舎利
四二一 支遁誡勖
四二六 虎渓三笑
四三一 文帝問法
四三六 採乳遇難
四四一 栴檀仏像
四四六 誦経延寿
四五一 罷道為僧
四五六 僧実救難
四六一 妙悟法華
四六六 晋王受戒
四七一 智璪見龍
四七六 慧乗対詔
四八一 法聡伏虎
四八六 焼毀仙書
四九一 面陳邪正
四九六 七詔還都
五〇一 勧度僧尼
五〇六 智興扣鐘
五一一 著内徳論
五一六 法順祈雨
五二一 玄奘取経
五二六 上表不拝
五三一 遠礼文殊

四六一 牟子理惑
四六六 耆域治病
四七一 道安遠識
四七六 羅什訳経
四八一 文帝論法
四八六 宝誌事蹟
四九一 法蔵縁起
四九六 法聡伏虎
五〇一 焼毀仙書
五〇六 面陳邪正
五一一 七詔還都
五一六 勧度僧尼
五二一 智興扣鐘
五二六 著内徳論
五三一 法順祈雨
五三六 玄奘取経
五四一 上表不拝
五四六 遠礼文殊

五一一 釈迦牟尼
五一六 明帝感夢
五二一 康僧舎利
五二六 図澄神異
五三一 法開医術
五三六 道融捎法
五四一 夢中易首
五四六 捨道奉仏
五五一 天雨宝華
五五六 達磨渡江
五六一 誦経免死
五六六 吐肉飛鳴
五七一 恵布度生
五七六 棄財為僧
五八一 玄琬勧誡
五八六 法融馴獣
五九一 通慧神異
五九六 窺基三車
六〇一 儀文行布

五六一 比法焚経
五六六 漢書論仏
五七一 善悪報応
五七六 浮江石像
五八一 支遁誡勖
五八六 虎渓三笑
五九一 文帝問法
五九六 採乳遇難
六〇一 栴檀仏像
六〇六 誦経延寿
六一一 罷道為僧
六一六 僧実救難
六二一 妙悟法華
六二六 晋王受戒
六三一 智璪見龍
六三六 慧乗対詔
六四一 法聡伏虎
六四六 焼毀仙書
六五一 面陳邪正
六五六 七詔還都
六六一 勧度僧尼
六六六 智興扣鐘
六七一 著内徳論
六七六 法順祈雨
六八一 玄奘取経
六八六 上表不拝
六九一 遠礼文殊

六一一 郯亭度蟒
六一六 鄧山舎利
六二一 支遁誡勖
六二六 虎渓三笑
六三一 文帝問法
六三六 採乳遇難
六四一 栴檀仏像
六四六 誦経延寿
六五一 罷道為僧
六五六 僧実救難
六六一 妙悟法華
六六六 晋王受戒
六七一 智璪見龍
六七六 慧乗対詔
六八一 法聡伏虎
六八六 焼毀仙書
六九一 面陳邪正
六九六 七詔還都
七〇一 勧度僧尼
七〇六 智興扣鐘
七一一 著内徳論
七一六 法順祈雨
七二一 玄奘取経
七二六 上表不拝
七三一 遠礼文殊

六六一 牟子理惑
六六六 耆域治病
六七一 道安遠識
六七六 羅什訳経
六八一 文帝論法
六八六 宝誌事蹟
六九一 法蔵縁起
六九六 法聡伏虎
七〇一 焼毀仙書
七〇六 面陳邪正
七一一 七詔還都
七一六 勧度僧尼
七二一 智興扣鐘
七二六 著内徳論
七三一 法順祈雨
七三六 玄奘取経
七四一 上表不拝
七四六 遠礼文殊

九六 義浄訳経
一〇一 詔迎六祖
一〇六 道岸説戒[27]
一一一 立壇祈雨
一一六 説法破竈
一二一 神会南参
一二六 中使問道
一三一 龍母湧泉
一三六 懶瓚食残
一四一 毀僧感報
一四六 武侯後身
一五一 併息詩書
一五六 全家悟道
一六一 宗密造疏
一六六 船子和尚
一七一 従礼祈雨
一七六 長汀布袋
一八一 欠〔螺溪興教〕[30]

九七 製無尽灯
一〇二 勅禁偽経
一〇七 華厳度蟒
一一二 勧修浄土
一一七 行思伝法
一二二 左溪遁跡
一二七 放光入定
一三二 飛錫卜地
一三七 山翁指示
一四二 僧道角法
一四七 神暄持呪
一五二 澄観造疏
一五七 無業頓悟
一六二 観音顕化
一六七 山神種菜
一七二 甯師食荷
一七七 為僧報父
一八二 欠〔懇留利生〕[31]

九八 還国伝法
一〇三 岳神受戒
一〇八 曹溪一宿
一一三 通玄造論
一一八 蓮灯満谷
一二三 金台迎接
一二八 希遷夢亀
一三三 南陽国師
一三八 自覚祈雨
一四三 誦偈出獄
一四八 三生相遇
一五三 湛然止観
一五八 李翺参問
一六三 欠〔韓愈参問〕[28]
一六八 知玄直諫
一七三 二王問法
一七八 勧停沙汰
一八三 四明中興

九九 北宗神秀
一〇四 曇璀遁跡
一〇九 処寂高潔
一一四 一行造暦
一一九 懐譲救僧
一二四 天兵護国
一二九 待鵲移巣
一三四 慧聞鋳仏
一三九 問法文殊
一四四 神人捨地
一四九 百丈清規
一五四 少康念仏
一五九 智辯結縁
一六四 欠〔楽天参問〕[29]
一六九 捨宅為寺
一七四 洞賓参問
一七九 聞法頓悟
一八四 警欧陽修

一〇〇 南派慧能
一〇五 頓悟法華
一一〇 帝問仏恩
一一五 無畏祈雨
一二〇 子鄰救母
一二五 公主祈嗣
一三〇 山神献地
一三五 粛宗応夢
一四〇 指往径山
一四五 懐空去虎
一五〇 裴休贈詩
一五五 李渤参問
一六〇 隠峰解陣
一六五 文帝嗜蛤
一七〇 悟達洗冤
一七五 閩王問道
一八〇 延寿放生
一八五 御前陞座

一八六　進輔教篇　一八七　聞雷悟道　一八八　北邙山行　一八九　草衣文殊　一九〇　著護法論
一九一　飯僧覲金　一九二　天母護身　一九三　普庵禅師　一九四　真武施巾　一九五　金光明懺
一九六　慧遠入対　一九七　上問三教　一九八　僧道辯論　一九九　勅焼道経　二〇〇　胆巴国師[32]
二〇一　普応国師[33]　二〇二　善世禅師[34]

注記：1嘉・上二「如来因地」と同話。2嘉・上三。3嘉・上四。4嘉・上五。5嘉・上六。6嘉・上七。7嘉・上八。8嘉・上九。9嘉ナシ。10正・上五二「成等正覚」。11嘉ナシ。12嘉ナシ。13嘉ナシ。14嘉ナシ。15嘉ナシ。16嘉・上二〇〇。17嘉ナシ。18正・下一「諸祖遺芳」。19正・下二「仏先現瑞」。20画のみ存。正・下三「梓潼聞仏」。21嘉・下四二「梁皇受戒」。22正・下五七「僧璨求法」。23正・下五八「慧思妙悟」。24嘉・下六七「毒酒不死」。25話番号「九十四」とする。26話番号「九十五」とする。27嘉・下一〇六「和帝受戒」。28正・下一六三「韓愈参問」。29正・下一六四「楽天参問」。30正・下一八一「螺渓興教」。31正・下一八二「懇留利生」。32話番号「一百末」とする。33話番号「一百一」とする。嘉ナシ。34話番号「一百二」とする。嘉ナシ。

次に刊行の経緯をみる。巻上末「釋音」の前に「如来應跡投縁、随機闡教。化啓憍陳、道終須跋。漢明感夢、靈應弥彰。諸祖継出、弘揚此道、文積巨万、簡累大千、像法浸末、信樂弥衰、文句浩漫、尠能該覧。偖抄衆典、顯證深文、控會神宗。辞畧意暁、標題圖畫、取則成規、目曰釋氏源流。募縁鋟梓、用廣流通、使見聞者、可不勞而博矣。（如来応跡投縁し、随機闡教す。化を憍陳に啓き、道を須跋に終ふ。漢明夢に感じて、霊応弥いよ彰らかなり。諸祖継出し、此の道を弘揚し、文は巨万を積み、簡は大千を累ぬれども、像法末を浸し、信楽弥いよ衰へ、文句浩漫にして、能く該覧するもの尠し。衆典を備抄し、深文を顕証し、神宗を控会す。辞略にして意暁さんとして、標題図画、則を取りて規と成し、目して釈氏源流と曰ふ。縁を募りて鋟梓し、用て広く流通せしめ、見聞する者をして、労せずして博すべからしめん）」と、正統元年刊本の刊語をそのまま載せるが、これに続いて「旹洪熙元年歳在乙巳秋七月解制日四明釋　寶成　誌」とあった刊記部分は削除し、「上

巻釋音」に直接続く。

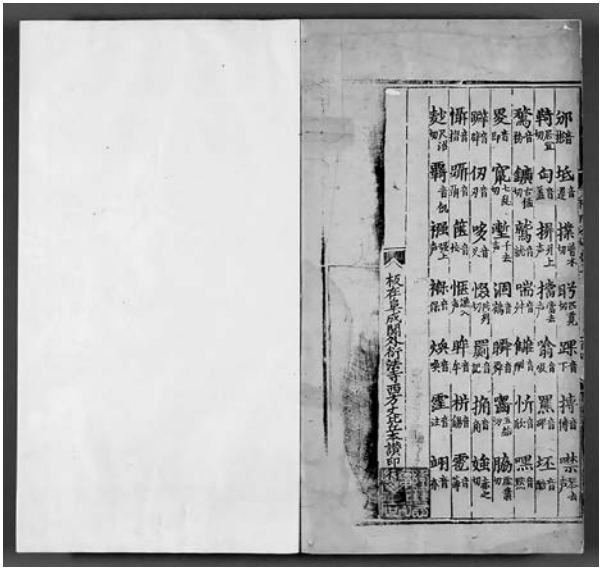
「上巻釋音」に次いで空一行の後、行内に双黒魚尾（行末）を附し「板在阜成関外衍法寺西方丈比丘本讃印行」との刊記がある【図6】。

巻下も本文に次いで「釋音」（一張）を附す。その首に「下巻釋音」と題し、次いで小字双行にて「伏願施財衆善人等見存獲福幽顯蒙恩世出世間福徳智恵在／佛光中吉祥如意（空三格）大興隆寺募縁比丘圓道發心重刊（伏して願はくは財を衆善の人等に施し、見存に獲福し、幽顯に恩を蒙り、世出世間に福徳智恵あり、仏光中に在りて吉祥如意ならんことを（空三格）大興隆寺募縁比丘圓道発心重刊）」との刊記がある【図7】。

これらによれば、当該の版本は、大興隆寺の比丘圓道が寄付を募り重刊した板木を用いて、衍法寺の比丘本讃が印刷刊行したものとのことである。大興隆寺、衍法寺、そして施主者が属する寺として名がみえる慈仁寺は、いずれも現在の北京市西城区に存した寺院である。[19]

圓道という比丘の詳細は知られないが、大興隆寺は金代の創建で、慶寿寺とも称し、明の正統十三年（一四四八）に修築され大興隆寺と名を改めた寺院である。[20]『中国古籍総目』によれば、明天順六年（一四六二）の大興隆寺刻本「古清涼伝二巻　広清涼伝三巻　続清涼伝二巻　成道記一巻　補陀洛迦山伝一巻」が存するとのことであるが、[21]書物の出版に関してより注目されるのは衍法寺である。『中国古籍総目』には、衍法寺の本讃（本賛）が関与した書物が複数掲げられている。[22]

・大明正徳乙亥重刊改併五音類聚四声篇十五巻附五音集韻十五巻　金韓道昭撰
　明正徳十一年金台衍法寺釈覚恒募刻嘉靖三十八年釈本賛重修本
・新編経史正音切韻指南一巻　元劉鑑撰



【図６】　第三冊　巻上刊記

【図７】　第六冊　巻下刊記

明正徳十一年金台衍法寺釈覚恒募刻嘉靖三十八年釈本賛重修本

・新編経史正音切韻指南一巻　元劉鑑撰

明嘉靖四十三年金台衍法寺釈本賛刻本

・新編篇韻貫珠集八巻　明釈真空撰

明正徳十一年金台衍法寺釈覚恒募刻嘉靖三十八年釈本賛重修本

・直指玉鑰匙門法一巻　明釈真空輯

明正徳十一年金台衍法寺釈覚恒募刻嘉靖三十八年釈本賛重修本（以上経部・小学類・音韻之属）[23]

・仏説盂蘭盆経疏孝衡疏［鈔］二巻　宋釈遇栄輯

明万暦十四年衍法寺釈本讃等刻本

・教乗法数十二巻　明釈圓瀞撰

明宣徳六年刻隆慶二年京都衍法寺釈本讃修補本（以上子部・釈家類・撰述之属）[24]

衍法寺僧の本讃は嘉靖三十八年（一五五九）から万暦十四年（一五八六）頃にかけて、複数の書籍の出版に関わった人物であり、圓道重刊『釈氏源流』の印行もこの時期に行われたものであったと推定できる。加えて注目すべきは、右の書目の内、明の釈真空の撰とされる『新編篇韻貫珠集』と『直指玉鑰匙門法』である。明・高儒の『百川書志』巻二・経・小学はこの二書の撰者について「皇明大慈仁寺沙門清泉真空撰」と著録している。[25] 大興隆寺、衍法寺、そして慈仁寺という近接する寺院のネットワークから書物の刊行がなされており、当該『釈氏源流』もそうした環境において生み出されたものであったことが想像されるのである。

慈仁寺は遼代の創建になる寺院であるが、成化二年（一四六六）には憲宗が皇太后の祝釐のために重修を行い、そ

の経緯を記す「御製大慈仁寺碑」も現存している。[26] その憲宗が『釈氏源流』を重視し、自ら序を付して改編本を刊行したことは先に触れた通りである。鉄斎旧蔵『釈氏源流』は巻上冒頭を欠き、そこに憲宗の序が存していたかどうかは確かめられないが、大英図書館所蔵の圓道重刊本の冒頭には憲宗の序が冠せられている。ところが憲宗の後、嘉靖年間には世宗による仏教排斥があり、圓道が属した大興隆寺は嘉靖十四年（一五三五）に火災にも遭い、その翌年、詔により寺は廃され講武堂（射場）に改められている。[27] 圓道重刊本が憲宗の序を加えるのは、仏教を信じ慈仁寺など北京の寺院を厚く支援した憲宗の世を称え慕う意図もあったかとも考えられる。

さて、明代の北京の寺院で版行されたこの圓道重刊本『釈氏源流』は、先にも述べたように、現在この鉄斎旧蔵本の他には、大英図書館、首都図書館に所蔵が確認できるのみであり、刊行以後どの程度普及したものか、詳しくは分からない。しかしながら、以下の情報は、圓道重刊本が後世の『釈氏源流』の流布に少なからぬ影響を与え、貢献を果たしていたことを窺わせる。

一つは、一六四八年に朝鮮禅雲寺で開板された朝鮮版『釈氏源流』[28]で、上図下文の形を留めるこの版本の巻上首の内題下には「大興隆寺（空四格）發心刊施流通」との刊記が存する。大興隆寺圓道の重刊本を元とする朝鮮版が作成されたものと考えられるわけであるが、その首に存する崇禎後戊子（一六四八）の河浩然の序には、この朝鮮版は松雲師（松雲惟政（一五四四～一六一〇））が日本から持ち帰った伝本を元に刊行したものとの経緯が記されており、[29] 大興隆寺圓道の重刊本が十七世紀以前に日本に伝えられていた可能性をも示唆している。

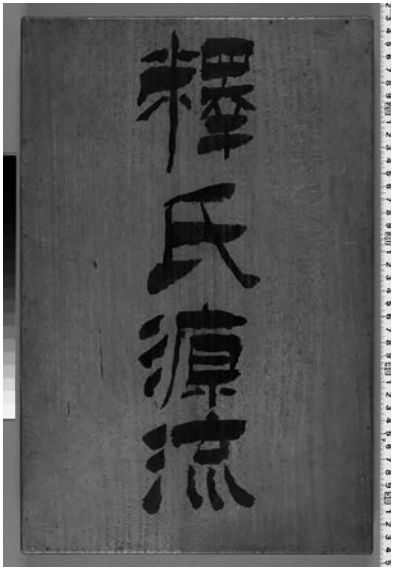
またもう一つは、清の永珊親王が『釈氏源流』の仏伝部分を二百八話に改編し、和碩豫親王裕豊が嘉慶十三年（一八〇八）に刊行した『釈迦如来応化事蹟』である。伝本は少なくなく、岩瀬文庫にも同治八年（一八六九）の重印本が所蔵されるが、[30] その巻首に冠される永珊の「重絵釈迦如来応化事迹縁起」には「余初自衍法蘭若得前明刻本釈氏源流

一部」とあり、衍法寺に存した明刊『釈氏源流』を入手した永珊親王がこれを広く流通するために改編本を作成したことが記されている。衍法寺の明刻本というものもおそらく圓道重刊本であったと思われる。

以上、圓道重刊本は、後に作成される朝鮮版や清の改編本へと受け継がれ、後世の『釈氏源流』の普及に重要な役割を果たすものとなったことを述べた。

次に、当該『釈氏源流』に加えられた富岡鉄斎の手跡と印について記す。

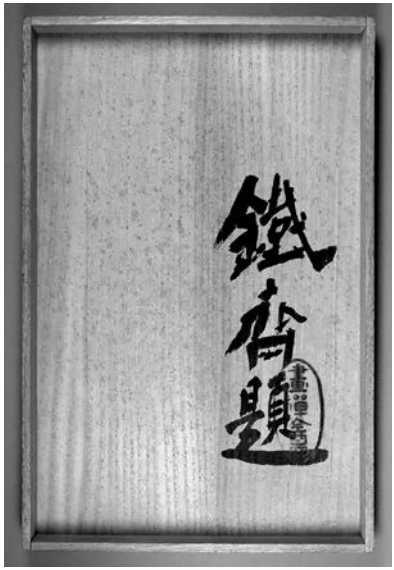
当該『釈氏源流』は、二重木箱入り。外箱は縦四三・七×横二八・〇×高一六・〇糎、二方桟の載せ蓋。内箱は縦四〇・〇×横二六・一×高一一・六糎、かぶせ蓋。白布にて包む。蓋板表面中央に「釋氏源流」と富岡鉄斎の題署あり【図8】。身にも白紙（縦四・八×横一八・七糎）を貼付し「釋氏源流」と書す【図9】。蓋裏面右下に「鐵齋題」と書し、その右下に楕円形陽刻「畫禪盦」烙印（縦八・三×横四・〇糎）を存す【図10】。後補自題帙入り。白布で包む。帙題僉（縦二八・三×横三・二糎）を貼布し「釋氏源流 全 鐵齋題」と書し、その左下に楕円陽刻「鋏齋」朱印記（縦一・八×横〇・九糎）を存す【図11】。なお署名の字体は晩年に近いものかとみえる。[31] また帙内側中央下、毎冊表紙右下、第六冊末に単辺方形陽刻「畫禪盦」朱印記（縦九・二×横四・四糎）を存す【図1】。また毎



【図8】 内箱蓋表面

【図９】　内箱身部分

【図11】　帙題僉



【図10】　内箱蓋裏面

冊首に円形陽刻「君子居之何陋之有・鐵叟」朱印記（縦五・八×横六・一糎。「君子之に居らば何の陋なることか之有らん」は『論語』子罕の文）を存す【図2】。

これらの印のうち、帙題僉に捺された「銕齋」印は篆刻家桑名鉄城（一八六四～一九三八）刻。桑名鉄城は鉄斎の印を多数作成している。その他の印は鉄斎刻[32]。

なお第三冊、第六冊尾に方形陰刻「隆慧／庵平／継造」朱印記を存すが印主は不明【図6】。昭和十三年（一九三八）の『富岡文庫御蔵書入札目録』所載の書影に当該印記が確認できることから、鉄斎以前の旧蔵者の印と思われる。

以上のように鉄斎の手跡と印を残し箱に収められた当該書は、数多の鉄斎蔵書においても「優品」として位置づけられていたものであり、『富岡文庫善本書影』[33]にも収められている。それではこの『釈氏源流』はいかにして、また何ゆえに鉄斎の所蔵となったのか。以下、次章では、鉄斎の蒐書やその売立までの経緯を辿りながら、鉄斎旧蔵『釈氏源流』が有する意味について考察を続ける。

二、富岡鉄斎と書物―蒐書から売立まで―

富岡鉄斎がいつ、どのようにしてこの『釈氏源流』を入手したのか、具体的な事情は突き止められない。しかしながら、鉄斎が書物に向き合う姿勢や、当時の状況に鑑みると、当該『釈氏源流』が鉄斎の手中に帰したのは、必然とも思われてくる。

（1）富岡鉄斎の蒐書

鉄斎の孫の富岡益太郎は、鉄斎について次のようなエピソードを紹介している。

鉄斎は終生自分は本来儒者であって、画を本業とするものではない。自分の画をみる人はまず画賛の詩や文を読んで、その意味を理解してから画を見てほしいと主張していた。……鉄斎は晩年までほとんど一日も読書を怠らず、驚くばかり詳しく蔵書を読破し、その中に興味を引く記事があればそれを画題にして画をかき、亦ある画題の画を依頼されれば、それに関する参考書を徹底的に調べた。……「必ず典拠あり」ということが鉄斎の作品についての自負の言である。一般の画家が下絵を作るところを、鉄斎は書物を読む、読書こそは鉄斎の画をかく原動力であり、書物を離れた鉄斎芸術は絶対にあり得ぬものである。[34]

鉄斎にとっての重要事が書物であり、読書であったことを端的に伝えるエピソードであるが、同様の鉄斎の姿を、中国文学研究者で芸術にも精通した青木正児はこう記している。

鉄斎翁は有名な蔵書家であつた上に、博覧な読書家であつた。蔭軒君（＝本田成之。筆者注）の話では、翁が絵を画く前には必ず書庫に入り、何か本を持ち出して読み耽る。本を置いたと思ふと、やがて塗抹し始めたと云ふ。また翁は非常に筆まめな人で、文献の抜書きを沢山作つて居られた。……想ふに翁の場合は画よりも先きに讃が出来たのだと謂へよう。[35]

本田成之は、中国哲学の学者であるが、鉄斎に書画を学び、『富岡鉄斎と南画』[36]という著書も残している。その「入室弟子」であった本田成之の目に焼き付けられた文人鉄斎の日々の姿である。書物に対する鉄斎の並々ならぬエネルギーと集中力が伝わる。

一方、絵については、鉄斎は独学だと称し、「明治十六、七年頃に高山寺の鳥獣戯画巻や、神護寺の源頼朝像を模写」[37]するなど専ら模写によって学んだようで、鉄斎が蒐書に際して「挿絵あるものを愛玩し」[38]たのも、鉄斎ならではの意図あってのことと了解される。そして、仏伝と中国への仏教伝播を絵と文とで綴る『釈氏源流』は、鉄斎にとっ

てはぜひとも入手すべき書物であったと考えられるのであるが、鉄斎が『釈氏源流』を必要とした背景として、日本においては『釈氏源流』が稀覯本であったという事情も考えられる。

先に触れたように、朝鮮禅雲寺版『釈氏源流』は十六世紀に日本に存在した『釈氏源流』を用いて刊行されたものであり、また現在増上寺に所蔵される正統元年刊『釈氏源流』は慶長元年（一五九六）に源誉存応に贈呈されたものであり[39]、鉄斎の時代以前の日本にも『釈氏源流』は伝来していたのではあるが、その存在は知られていなかったようである。というのも、大正八年～同十一年（一九三三～一九三六）に大東出版社から刊行された『仏書解説大辞典』には、『釈迦如来応化事蹟』四巻（龍谷大学蔵）及び『釈迦如来応化録』六巻（『卍字続蔵経』所収）が著録されるのみであり、『釈氏源流』は立項されていない。『釈迦如来応化事蹟』は先にも触れたように清の永珊親王が『釈氏源流』の上巻仏伝の部分のみを改編したもので、実は富岡鉄斎と親交のあった大阪の書肆鹿田松雲堂の明治末から大正にかけての目録に「釈迦如来応化事跡四巻〔全篇絵図入極精刻／極大形白紙美本　一套〕四冊」の広告が出ているが[40]、当該書籍の行方は確認できない。鹿田松雲堂については後にも触れる。もう一方の『釈迦如来応化録』も仏伝部分のみ計二百八話を収める改編本で、正保五年（一六四八）の和刻本があり（早稲田大学図書館等所蔵）、明治三十八年（一九〇五）から大正元年（一九一二）に刊行された『卍字続蔵経』（『大日本続蔵経』）に活字版を収めるが、これは文のみで絵は含まないテキストである。

要するに、鉄斎当時の日本において、圓道重刊『釈氏源流』は、明刊帯図本の初期の様式を伝える稀少な存在であったわけである。それでは、鉄斎はいかなるルートから当該書を入手したのだろうか。その具体的記録は残らないが、鉄斎周辺の状況から鑑みるに、いくつかの可能性が考えられる。

まず、当時は中国の書店による古書画の即売会が行われており、鉄斎は、大正三年（一九一四）六月十三日と大正

五年（一九一六）十月二十四日に、北京の書籍商翰文斎の古書画即売会に足を運んでいる。[41]

また、日本の古書肆を通して購入した可能性も高い。先に鹿田松雲堂の目録に「釈迦如来応化事跡」が掲載されていることを紹介したが、例えばその鹿田松雲堂の『書籍月報』には「今回左に列記の古唐本類清国北京より齎し帰り申候……」[42]とある。そしてそれら古書肆による輸入書を鉄斎が多く購入していたことについて、鉄斎の長男謙蔵の妻とし子の追想記に「鉄斎の一番好きなものは書物であつた。従つてその発売の稀覯書目録などを見ることは、こよなく楽みであつた。中国へ書物を仕入れに行つた松雲堂や、文求堂が帰ってくるのを待ち兼ねて、まだ印刷に付せられてない新書の目録を見せて貰つて直に注文するのであつた。これは謙蔵の計らひで、いつもいち早く鉄斎の目に触れる事が出来た」とあり、[43]中国からの輸入書の購入に熱心であった様子が知られる。

そしてここにみえるように、鉄斎の蒐書をサポートし貢献したのは子の富岡謙蔵（一八七三～一九一八）であった。謙蔵は中国の古鏡の研究で名を残した学者であり、京都帝国大学附属図書館の嘱託として文科大学開設に備えての図書蒐集に携わった後、[44]京都帝国大学文科大学講師を務めた人物で、明治四十三年（一九一〇）、同四十五年（一九一二）、大正三年（一九一四）、同六年（一九一七）と四度にわたり中国に赴いており、[45]「書物を初めとして、書画の材料やその他鉄斎の仕事に役立つあらゆる品を買い求めて来て鉄斎を喜ばせた」のであった。[46]また「文求堂将来品の最も熱心な購求者だったと伝えられて」[47]おり、例えば現在国宝となっている唐鈔本『王勃集』巻第二十九・三十は、謙蔵が「重価を惜まず」五千八百金で購入したものであった。[48]鉄斎は謙蔵を通して、内藤湖南、狩野直喜ら京都帝国大学の教授陣をはじめ、当時京都に亡命していた中国学者羅振玉とも親しく交流した。[49]古典籍を専門とする学者らとのネットワークが築かれたことにより、富岡家の蒐書はその数も質もさらに充実度を増したのであった。そして、鉄斎を取り巻くこうした環境が、明刊『釈氏源流』を鉄斎の手元に引き寄せたものかと想像されるのである。

（2）富岡文庫の入札、売立

謙蔵は、父に先んじて大正七年（一九一八）、四十六歳でこの世を去る。その後富岡家では、大正十一年（一九二二）に三階建ての書庫魁星閣も落成するが、大正十三年（一九二四）十二月三十一日に鉄斎は死去。八十九歳であった。

その後、昭和十三年（一九三八）に至り、富岡家の蔵書の一部が売立てられることとなり、翌年にかけて二度の入札会が開催された[50]。この空前絶後の大口入札を取り仕切ったのは鹿田松雲堂で、それぞれ目録も作成された（『富岡文庫御蔵書入札目録』『富岡文庫御蔵書第二回入札目録』）。そしてその第一回目の目録に、「釈氏源流 六冊 明板絵入本 鉄斎先生箱書付」が書影写真とともに掲載されている。

鹿田松雲堂と鉄斎、謙蔵との関係は深い。松雲堂が発刊した古書販売目録『書籍月報』には、例えば、『春荘賞韻』所載の端春荘の肖像を鉄斎が精密に模写したうえに、書估であった春荘が火災に見舞われた後に伴蒿蹊が寄せた詩を加えて書し松雲堂に贈ったものが掲載されている[51]。また『書籍月報』には、松雲堂第三代堂主を嗣いだ鹿田伸四郎に謙蔵が贈った「題言」も掲載されているが[52]、注目されるのは謙蔵がこの文の中で、同年より刊行が開始された蔵経書院の『大日本続蔵経』に言及し、「文明の盛事」と評価していることである。謙蔵のこうした仏教典籍の刊行への注意は、『釈氏源流』への関心につながるものであったかとも想像したくなる。

さて、富岡文庫第一回目の入札会は、昭和十三年五月二十八日に東京、六月一日に京都、同二日に大阪で下見が行われ、六月四日、五日に大阪住吉公園内の料亭新明月にて入札が行われた。「富岡文庫蔵書落札値段表」によれば「明板釈氏源流」は三百六十円で「堂場」によって落札されている[53]。堂場とは、和歌山の古書肆酔古堂の堂場武三郎で[54]、堂場はこのとき「本草彙箋 順治刊」「写本愚管抄 三条実美公御書入本」「今市物語 五井蘭州真蹟仮名文 西巌寺古硼和尚画 鉄斎先生箱書付」「敦賀十勝 鉄斎先生御手入本」「三十帖策子 鉄斎先生箱書付」等も落札している。ちなみ

に、この第一回目の売立での最高落札額は、「王勃集」で「一萬四千二百十八円」という破格の値段であった。

おわりに

以上、富岡鉄斎旧蔵明刊『釈氏源流』について、刊行の経緯及び書誌情報、また鉄斎の蒐書や蔵書売立の状況について述べてきた。

当該書が有する意義は、さまざまな角度から指摘できようが、まずは、『釈氏源流』は中国をはじめとしてアジアに展開した仏伝文学の中心的存在となり、そのテキストは韓国、日本、ベトナム、タイなどに広く伝播し、壁画も含む数多の派生形をも生み出しており、また欧米においても伝本や関連の書物が見出されている。[55] そしてこの鉄斎旧蔵圓道重刊本の「出現」によって、仏伝テキストの時空を超えた広がりや連なりへの観察、考察を一層推し進めていくことが可能となろう。

また圓道重刊本は、明代の北京の寺院で刊行された絵入り本として、中国木版画史、あるいは中国の出版文化史における小説や戯曲の絵入り本との関係の検討に資するのみならず、憲宗による内府刊本など宮中との関係、また、施主者の存在からは当時の寺院経営の状況も窺うことができるものである。さらには絵画資料としては、京都嵯峨清涼寺の「釈迦堂縁起絵巻」との関係が指摘されている[56]など、美術史研究の資料として今後さらなる活用が期待される。

そしてまた、鉄斎の蔵書は、二十世紀前半期における書物の往来や古書の流通、蒐書、購書のありようを伝える最たる事例であり、その一本であるこの『釈氏源流』の存在を通して、富岡文庫が有する性格や意義の一端を具体的に照らし出していくことができよう。このことは鉄斎という巨匠の文業と画業への考察とともにさらに追究していくべき課題であるが、例えば『釈氏源流』に存する印記の「畫禪盦」は、明代後期の文人であり書画家の董其昌が用いた

号（畫禪室）に由来する。そして鉄斎の画業について孫の益太郎は次のように述べている。「鉄斎の画は南宗画または文人画と呼ばれる流派に属している。明の董其昌が宮廷画院の絵画を北宗画、在野的な文人の絵画を南宗画と二つの類型をたてたことによる。……鉄斎は中国の董其昌の書中にある「万里の路を行かず、万巻の書を読まずして、画祖とならんと欲すも、其れ得べけんや。此れ吾が曹に在りて之を勉めん、庸史に望むこと無し」[57]との言を服膺し実践した」[58]。また、「鉄斎は南画協会と後素如雲社の展覧会に限りその作品を出品したが、その他の展覧会には審査員等にはなっても、作品を出品したことはない」[59]ともある。日本では、明治十五年（一八八二）にフェノロサが龍池会で行った講演「美術真説」[60]において文人画の目的を「画術ノ妙想ニアラズ」と否定したことを機として、以後文人画は衰退の一途を辿った。しかしながら鉄斎の子の謙蔵は、大正七年（一九一八）に京都帝国大学で「清初の画家を論ず」と題する夏季科外講演を行い、董其昌の教えを受けた王時敏ら「明代の南画の正統を継いで、更に一種の新生面を開いた」[61]いわゆる「四王呉惲」について講じている。そして謙蔵の死後に出版されたその講演筆記は、「明治大正の御代に於て国運は空前の発展をしなけれ共、文藝の一点に於ては、清朝の乾隆、嘉慶の時代にも及ばず、文展の如きものは天下後世に害毒を流すものといふべきである」[62]との強い口吻で結ばれている。文人画（南画）の排斥、さらには文展のあり方への議論[63]など、絵画をめぐる当時の趨勢を重ね合わせてみるとき、この鉄斎旧蔵『釈氏源流』に存する「画禅盦」の印記は、きわめて深刻かつ複雑な意味をもって立ち上がってくるものにみえる。

書物が内包するメッセージは実に多様である。それをどれほど豊かに引き出していくことができるか。この鉄斎旧蔵明刊『釈氏源流』は、これを手に取る者をさまざまな思考の可能性へと導いてくれるものといえよう。

注

（1）「鉄斎逸事」（一九六六年初出、『墨林閒話』所収、のち『神田喜一郎全集』第九巻、同朋舎出版、一九八四年所収）。

（2）『隋書』崔儦伝。『北史』崔儦伝参照。

（3）『釈氏源流』の伝本に関しては、Tsai Suey-Ling（蔡穂玲）, *The life of the Buddha: Woodblock Illustrated Books in China and Korea*, Harrassowitz Verlag - Wiesbaden, 2012. に詳述されており小論も該書を参照したところが多いが、鉄斎旧蔵本への言及はない。また和刻本やベトナム本などアジア、さらには世界に広がり伝わる『釈氏源流』の諸本については小峯和明「日本と東アジアの〈仏伝文学〉」（小峯和明編『東アジアの仏伝文学』勉誠出版、二〇一七年）、同「『釈氏源流』の伝本をめぐって」（説話文学会編『説話文学研究の最前線 説話文学会55周年記念・北京特別大会の記録』文学通信、二〇二〇年）等の一連の研究に詳しい。また小峯和明氏・張龍妹氏が主宰する東アジア古典研究会では二〇一二年より『釈氏源流』の輪読が継続されており、小論はその成果にも多くを拠っている。

（4）葉恭綽による一九三五年の複製があるが未見。中国美術全集編輯委員会編『中国美術全集 絵画編20 版画』（上海人民美術出版社、一九八八）に影印半葉のみ（巻下・四六「達磨渡江」）あり、解説（李之檀執筆）には「明永楽間（公元一四〇三～一四二四年）刊本 縦二九釐米 横一七釐米」とし、明政府の出版機構である「経廠」で刊行されたものとする。

（5）注（3）前掲蔡穂玲書、二七頁。

（6）中国書店蔵珍貴古籍叢刊『釈氏源流』（中国書店、二〇一二年）。

（7）注（3）前掲蔡穂玲書、一二三～一二四頁。

（8）嘉靖三十五年刊本は各巻の「釈音」に続き施主者名を列挙する。また注（3）前掲蔡穂玲書（三〇頁）は台湾国家図書館蔵嘉靖三十五年刊本の巻上首に王勃の「釈迦如来成道応化事蹟記」を冠することを紹介しているが、これが洪熙元年刊の段階から存したものかどうかは待考。

（9）鄭振鐸旧蔵書。国家図書館古籍館編『西諦蔵書善本図録 附西諦書目』（中華書局、二〇〇八年）は「釈氏源流応化事蹟二巻」と著録する。鄭振鐸編著『中国古代木刻画選集』第二冊 明・初期（人民美術出版社、一九八五年）に影印半葉のみ（巻上・八四「降伏六師」）あり。

(10) 増上寺蔵本については実見調査、撮影の便宜をいただいた（二〇二一年五月十三日）。なお増上寺蔵本の詳細については稿を改めて論じる予定である。また、畑麗「釈迦堂縁起絵巻の研究―仏伝図としての視点を中心に―」（『鹿島美術研究年報』二五別冊、二〇〇八年十一月）参照。

(11) 中国国家図書館蔵本と増上寺蔵本は版心魚尾下にみえる施主者名も一致する。

(12) 嘉靖三十五年刊本巻上最終二百話末には「優婆塞顧道珎書」とみえる。

(13) 現在中国国家図書館、広東省中山図書館等に所蔵があり、国家図書館蔵本は影印が刊行されている（『中国古代版画叢刊二編』第二輯（上海古籍出版社、一九九四年））。またアメリカ・ワシントン議会図書館には彩色の施された本が存する。

(14) 永楽年間から正統年間に至る遷都の経緯は新宮学『北京遷都の研究―近世中国の首都移転―』（汲古書院、二〇〇四年）に詳しい。

(15) 四冊。注(3)前掲蔡穂玲書、一五三～一六〇頁参照。

(16) 下巻のみ存。二冊。首都図書館編『首都図書館古籍善本書目』（国家図書館出版社、二〇一一年、二三八～二三九頁）参照。首都図書館本については中国・復旦大学図書館の呉格氏のご教示を得た。

(17) 仏の教え、及びそれを中国に伝えた弟子等の業を讃える憲宗が、宝成の『釈氏源流』を評価し、これを広く伝えるために重版すると述べるもの。なお大英図書館蔵本は憲宗序の後半一張のみを残す（小峯和明氏の調査による）。

(18) 大英図書館蔵本とも一致。注(3)前掲蔡穂玲書、一五七頁参照。

(19) 大興隆寺は「西長安街」（清・于敏中等編『日下旧聞考』巻四十三・城市（北京古籍出版社、一九八三年）参照）、衍法寺は「阜成門之西一里許」（明正徳七年五月一日刻「勅賜衍法寺重修碑」（北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』明・第五三冊（中州古籍出版社、一九八九～一九九一年）参照）、慈仁寺は「宣武門外可二里」（『日下旧聞考』巻五十九・城市）の場所にあった。現在は大興隆寺と衍法寺はなく、慈仁寺が大報国慈仁寺として残るのみ。

(20) 注(19)前掲『日下旧聞考』巻四十三参照。

(21) 中国古籍総目編纂委員会編『中国古籍総目』史部2（中華書局・上海古籍出版社、二〇〇九年、五六六頁）。

(22) 『中国古籍総目』の検索は「中国古籍総目検索システム」（(有)凱希メディアサービス）を利用した。なお『中国古籍総目』

は本文に挙げた版本の他にも衍法寺で刊行された書物として「大蔵一覧集十巻」「仏説阿弥陀経一巻」「妙法蓮華経七巻」「仁王護国般若波羅密経二巻」「仏遺教経論疏節要一巻」「牧牛図頌二巻又十頌一巻」「浄土津梁十三種」「慈悲道場懺法十巻」等を著録している。

(23) 中国古籍総目編纂委員会編『中国古籍総目』経部2（中華書局、二〇一二年、一一三八・一一八二～一一八四頁）。

(24) 中国古籍総目編纂委員会編『中国古籍総目』子部7（中華書局・上海古籍出版社、二〇一〇年、三三二一・三四二八頁）。

(25) 『中国歴代書目題跋叢書 百川書志 古今書刻』（世紀出版集団・上海古籍出版社、二〇〇五年）。

(26) 注(19)前掲『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』明・第五十二冊。また『日下旧聞考』巻五十九も参照。

(27) 注(19)前掲『日下旧聞考』巻四十三参照。なお大興隆寺はその後寺に戻され、康熙十七年（一六七八）の「重修興隆寺碑記」等が残る。注(19)前掲『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』清・第六十三冊参照。

(28) 国立中央博物館美術部『美術史学誌』Ⅲ（韓国考古美術研究所、二〇〇〇年十二月）に影印がある。また天理図書館に上巻二冊を存する（天理図書館編『天理図書館叢書第二十五輯 天理図書館稀書目録 和漢書之部 第三』（天理大学出版部、一九六〇年）参照）。注(3)前掲蔡穂玲書、一六一～一七五頁。

(29) 注(3)前掲小峯和明論文参照。

(30) 国文学研究資料館日本古典籍総合データベースにて閲覧可能。上海古籍出版社（一九九四年）、文物出版社（二〇二〇年）から同治八年重印本の影印、巴蜀書社（一九九八年）から光緒七年（一八八一）刻本の影印が刊行されている。

(31) 横内正弘『鉄斎』三、落款の変遷（河原書店、一九六九年）を参照。

(32) 鉄斎美術館編『鉄斎研究 富岡鉄斎用印大成』七三（清荒神清澄寺、二〇一〇年十月）参照。

(33) 大阪府立図書館編『富岡文庫善本書影』（小林写真製版所出版部、一九三六年）。

(34) 富岡益太郎「鉄斎の画業」（朝日新聞東京本社企画部編『没後五十年記念 富岡鉄斎展図録』朝日新聞東京本社企画部、一九七四年）。

(35) 青木正児「鉄斎 画讃釈文解説」画讃釈文解説の後に（一九五六年初出。『青木正児全集』第六巻、春秋社、一九六九年）所収。

(36) 本田成之『富岡鉄斎と南画』（湯川弘文社、一九四三年）。

(37) 注(34)前掲富岡益太郎論文。
(38) 反町茂雄「昭和期最大の売立―富岡文庫」(『一古書肆の思い出2 賈を待つ者』平凡社、一九八六年)。
(39) 注(10)前掲畑麗論文。
(40) 『書籍月報』号外(明治四十一年十一月七日(『書誌書目シリーズ107 鹿田松雲堂 書籍月報』第十九巻、ゆまに書房、二〇一五年))、『古典聚目』号外(明治四十二年六月二十六日、大正三年四月、大正八年五月(『同108 鹿田松雲堂 古典聚目』第一巻、第三巻、第六巻、ゆまに書房、二〇一五年))に掲載。
(41) 富岡益太郎編「富岡鉄斎年譜」(『鉄斎研究』四~九(鉄斎研究所、一九七一年六月~一九七二年十一月)参照。
(42) 注(40)前掲『書籍月報』号外(明治四十一年十一月七日)。
(43) 富岡とし子「父・鋭斎のこと」(小高根太郎編著『富岡鉄斎』日本美術新報社、一九六一年)。
(44) 神田喜一郎「支那学者富岡桃華先生」(一九六〇年初出、『敦煌学五十年』所収、のち『神田喜一郎全集』第九巻、同朋舎出版、一九八四年所収)。
(45) 小高根太郎『富岡鉄斎』(吉川弘文館、一九六〇年)等参照。
(46) 注(34)前掲富岡益太郎論文。なお謙蔵による蒐書については高木理久夫氏のご教示を得た。
(47) 注(38)前掲反町茂雄参照。
(48) 内藤虎次郎「富岡氏蔵唐鈔王勃集残巻」(一九二一年初出、『研幾小録』所収、のち『内藤湖南全集』第七巻、筑摩書房、一九七〇年所収)参照。
(49) 注(41)前掲「富岡鉄斎年譜」、注(45)前掲小高根太郎書、また小高根太郎『富岡鉄斎の研究』(芸文書院、一九四四年)等参照。なお鉄斎の墓誌は狩野直喜、長尾雨山、小川琢治、本田成之らの撰になる。
(50) 入札会の詳細については注(38)前掲反町茂雄、また同「富岡文庫入札会について―若き友への報告―」(『日本古書通信』一九三八年十月二十日)、同「守部翁遺稿と富岡文庫本と」(『同』一九三九年四月五日、ともに『反町茂雄文集 上 古典籍の世界』文車の会、一九九三年所収)等参照。
(51) 『書籍月報』五四号(明治三十一年五月二十五日、注(40)前掲『書誌書目シリーズ107 鹿田松雲堂 書籍月報』第九巻、二〇一

四年）。

（52）『書籍月報』六九号（明治三十八年十一月二十七日、注（40）前掲『書誌書目シリーズ107 鹿田松雲堂 書籍月報』第十六巻、二〇一五年）。

（53）柴田光彦編『書誌書目シリーズ53 反町茂雄収集 古書販売目録精選集』第七巻（ゆまに書房、二〇〇〇年）。

（54）『昭和十四年五月 全国古書籍商聯盟 会員名簿』（全国古書籍商聯盟本部、一九三九年）参照。堂場武三郎は、大正十五年（一九二六）四月に「紀州に於ける史跡、名勝、民俗、伝説等の研究発表を主と」する雑誌『紀伊郷土研究』を創刊する（肥田路美氏のご教示による）が、当該誌は同年十一月の第三冊で終了。反町茂雄は堂場武三郎が「古本屋さんには珍しい豪快な人」で、反町が落札した和歌山に関わる古書を譲り受けたいと懇願されたエピソードを記している。反町茂雄「写本、実は名家自筆草稿類」（注（38）前掲反町茂雄書所収）。

（55）注（3）前掲小峯和明論文参照。

（56）注（10）前掲畑麗論文。土谷真紀『初期狩野派絵巻の研究』第三章「「釈迦堂縁起絵巻」――渡来図像と異国風俗と本朝風俗と」（二〇〇七年初出、青簡舎、二〇一九年）参照。

（57）董其昌『画禅室随筆』巻二に「不行万里路、不読万巻書、欲作画祖、其可得乎。此在吾曹勉之、無望庸史矣」（四庫全書本）とある。

（58）注（34）前掲富岡益太郎論文。

（59）注（41）前掲富岡益太郎編「富岡鉄斎年譜」明治三十年（一八九七）（『鉄斎研究』六、一九七二年二月）。

（60）明治文学全集七九『明治藝術・文学論集』（筑摩書房、一九七五年）所収。

（61）富岡謙蔵述『四王呉惲』（博文堂、一九一九年）。

（62）注（61）前掲富岡謙蔵書。

（63）文展への批判としては夏目漱石「文展と芸術」（一九一二年初出。『漱石全集』第十六巻（岩波書店、一九九五年）所収）等参照。

（こうの　きみこ　文学学術院教授）